小仙の「忠九」を聴く

五松園主人

八月十六日　大阪放送局から竹本小仙（引語り）の忠臣藏九段目が放送された無論忠九は斯道で最も重んぜらるゝ語り物、忠九は知らないと辭して耻ぢにならない。人情の極致を語り拔く事が忠九を語る人の藝術上の責任とされてある程人道上重大意氣ある語り物、鍛錬も技工も人情も超越し聲が良いの惡いの、腹が強いの薄いのと云ふ問題がうろ付く樣では忠九を語る資格は無いと論斷されてある。それ程重大なる語り物を斯道振興に精進しつゝある鸚鵡會の旗頭竹本小仙孃が文樂座の三味線の大師匠、日本一の六代目鶴澤友次郎の薫陶にて出來上つた山科を語る。敵の多い人だけ、また味方の多い人だけ凡そ淨瑠璃に趣味を有する程の人は敵も味方も此の放送は聞いたであらう。

減多に放送を好まない記者が計らず『これから竹本小仙さんの假名手本忠臣藏九段目彈語りです』との口上に誘はれて耳を聳てると「引立入にける」二の音を自在につかひ得る調子、淨瑠璃の精神、文章の意味、人世の道義を語り得るは此の聲この調子でなくてはならない、斯程の人が他にあるであらうかと思ふ裡「人の心の」重ならぬ實に尊重すべき曲譜であると感じ同時に誰れかこれに比儔すべきもの男にありや女にありやと詮索して見たが無い、「奥深き」語り得て妙、惜しい事には奥深きが深くに聞へたは耳の罪だらう。お石は少し强く、となせは下手より、小浪は始終處女のおとなしく親しみあり愼み深き最も語り難い所を何人か斯く迄語り得るであらうか。俄に思ひ出し見出し得ない「覺悟はよいかと立派にも」聞へた上々吉、それから鶴の巢籠りが無事。最難物にして性根場たる「振上る双の下尋常に座をしめ手を合せ」無念無想の小浪の落付、これを斯くまで語れた人を聞いた事なし「共にひつそと」迄、十分語れる好調子であるが今一文高かつたら一倍大衆の歡迎を受けるであつたらう「藝といふものは、大衆の機嫌を考慮するものにあらず」と云ふ論も立つから强ち强調するではなく只だ善きが上にもと思ふ一念で思はず此の慾望を言はしめた。我れと思はん人は男女を論ぜずドシ〳〵放送して雄々しく敢闘すべし。而して其の爭ひは顏や席順であつてはならぬ。陰險極まる嫉視反目にあらずして全く藝の眞髓でなくてはならない。淨瑠璃寂寥の折から切望に堪へざるなり。